

## 第四章 自己の神経生物学的分析

---

本書で提示する仮構的な自我／自己の心理学的モデルは、私たちの意識経験を「意識の場」「一次現象特性」「二次現象特性」「二次現象特性以降（意味処理など）」の少なくとも四つに区分する。私たちが普段感じているような自己の感覚は、このような一連の基礎的な心の特性やはたらきによって生まれている。

五蘊によって仮構的な自我が生じる基本的メカニズムを理解したいと願うならば、まずはこの基本的な四つの心理プロセスに相関する神経生物学的な事象や機構を理解せねばならないであろう。現代の認知科学は、そのプロセスの後半の「二次現象特性」および「二次現象特性以降」のレベルに、研究の焦点を合わせているが、心の真の姿を全体的、統合的に理解したいと願うのならば、そのプロセスの前半の「意識の場」および「（無常性が顕現する）一次現象特性」のレベルに相関する神経生物学的な事象や機構を見出さねばならない。

### 四章一節 ビルディング・ブロック・アプローチと 統合野アプローチ

米国の哲学者ジョン・R・サール（1932～）は現代の意識研究の基本的方法論を吟味して、意識研究の方法を「ビルディング・ブロック・アプローチ」と「統合野アプローチ」の二つに分類している<sup>(1)</sup>。サールが提唱するこの二つのアプローチの相違は、意識に対しての私たちの理解の仕方の相違を反映するものである。

ビルディング・ブロック・アプローチは、私たちの意識経験をクオリアの単位（ビルディング・ブロック）で組み立てられた積み木細工のようなものとして捉えている。赤の色やチェロの音、レモンの香りのようなクオリアの単位が、積み木細工のように集合して、一つの心が出来上がっていると考えている。古典物理学の原子論のように、クオリアという基本単位が集合することによって意識世界が出来上がっていると考えている。このアプローチの最もベーシックな戦略は、赤に相関する神経活動、チェロの音に相関する神経活動というように、クオリア一つ一つの単位で、それに相関する神経活動を探索してやることである。まずは、クオリアという積み木一個が生じるための基本原理を理解しなければならない。

これに対して、統合野アプローチは、意識内容に先立って「意識野 (conscious field)」

というものがあり、知覚入力などによって意識野が変化する、もしくは意識野に凹凸が生まれると考えている。私たちの意識経験は、バラバラの積み木が寄り集まって出来ているようなものではなくて、一切を包括する「場 (field)」というものがまず先に在って、その「場」の変動によって意識経験が生じていると考えている。現代物理学の量子場の理論のように、「場」の状態変化によって意識世界が出来上がっていると考えている。このアプローチの最もベーシックな戦略は「意識している脳と、無意識の脳は何が違うのか」を精査することである。まず先にやるべき仕事は、個々のクオリアに焦点を絞るのではなく、意識野そのものに着目し、それに相関する脳活動を見出してやることである。そして次に、その意識野に変動や修飾をもたらしているメカニズムを明らかにしなければならない。

これまで述べてきたように、本書は私たちの意識経験を「意識の場 (意識することそのもの)」と「意識内容」の二つに区分しているが、このような立場はサールが分類する二つのアプローチのうち、「統合野アプローチ」のほうを有効な戦略として支持するものである (サール自身モビルディング・ブロック・アプローチよりも、統合野アプローチのほうが有望であると考えている)。脳の機能的状態の最も大きな相違は、意識そのものの有無である。この二つの異なる状態をもたらしている神経生物学的機構を理解することが最も重要な探究の課題となる。それが理解できたならば、次には意識野の変動や修飾に相関する脳の情報処理プロセスを明らかにしなければならない。知覚入力などに応答して、意識野が変化するメカニズムを神経生物学的に理解しなければならない。今日の意識研究者や歴代の止観の行者らが述べるところによれば、意識は非常に短い時間スケールでは離散的なスナップショットとして顕現しているようであるが、そのような波動性を意識にもたらず神経生物学的なメカニズムを理解しなければならない。そしてさらに、私たちの意識経験の中では、色、音、匂い、味、感<sup>いる</sup>触、思考、感情、欲求などといったクオリア群はバラバラではなく、美しく調和し、統合しているのだが、このような統合性を意識野にもたらず神経生物学的なメカニズムについても理解しなければならない。

---

1 ジョン・R・サール「マインド 心の哲学」山本貴光、吉川浩満 (訳)、朝日出版社 (2006) 一九九～二〇五頁